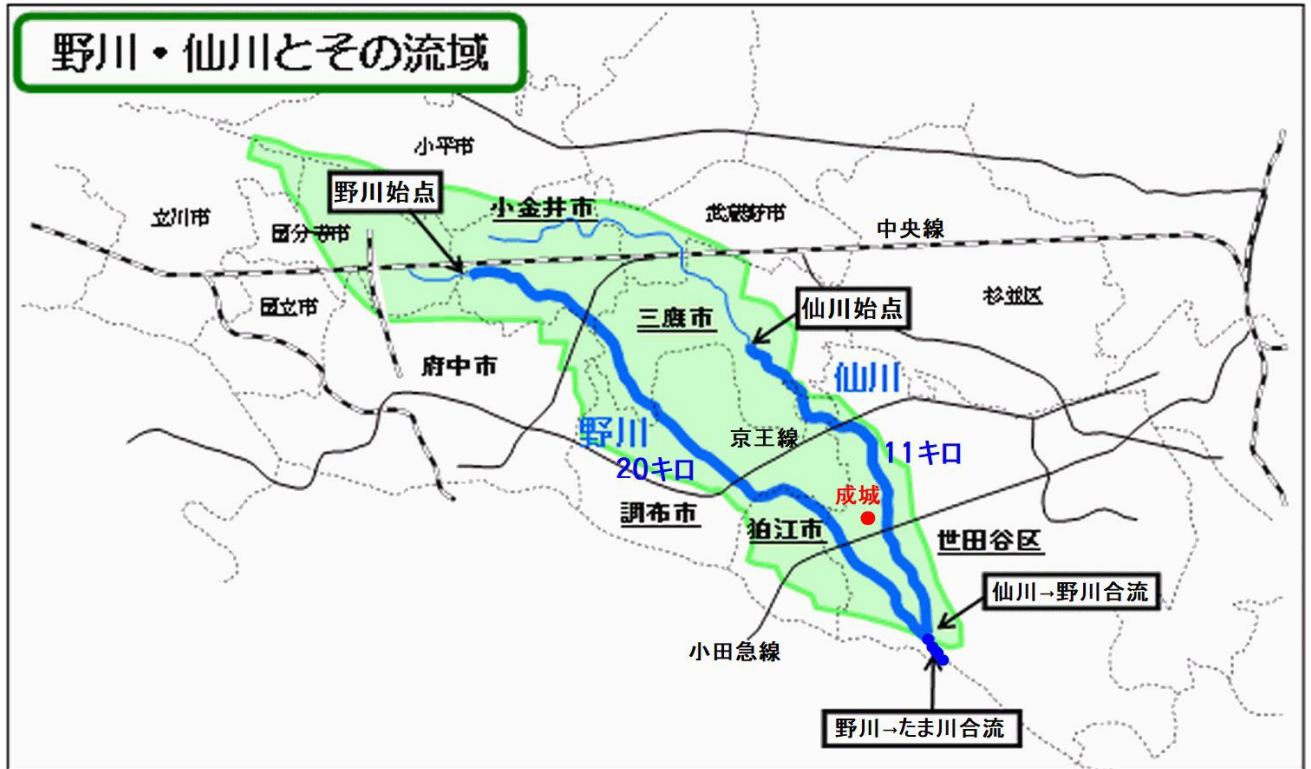


桜につられ、野川と仙川の沿道を歩く

(時季：2018年3月15日から4月2日)



野川は中央線国分寺駅近くの「恋ヶ窪」というロマンチックな地名にある湧水池に端を発している。そこは日立の中央研究所の敷地内にあり、年に2回の公開日以外は近づけない(追記参照)。流れ出た水は国分寺崖線に沿って湧水を集めて流れ、多摩川との合流点に達している。川といっても、最初は国分寺の市街地を流れる幅1メートルほどのコンクリート水路に過ぎないが、小金井市に入ると兩岸に遊歩道を持つ立派な川に変身する。

下図が水路が川に変わる境界で、上にかかる鞍尾根橋より向こう側が国分寺市である。これより下流は、各自治体が整備に力を入れて美しさを競っている。延々と、人の手が入った都会の自然が合流点まで続いている。川には鯉が泳ぎ、水辺に鴨や白鷺が遊ぶ。桜並木が点在し、開花のシーズンでは視界から桜が消えることが珍しいくらいである。



両岸の遊歩道は、二三か所一般道に出て迂回するところもあるが、ずっと川に沿っている。下の写真は、中央自動車道の下をくぐるあたりの風景である。この日は土曜日、地域主催の桜祭りとあってか、大勢の家族連れで賑わっている。



週日に歩けば、ジョガーやウォーカーと時折出会うばかりで、あまり人を見掛けない。下図のような景色を独り占めするのは、勿体ない限りである。



歩くにつれて刻々と風景が変わり飽きることはない。途中を省略して末端までゆこう。小金井市、三鷹市、調布市、狛江市、世田谷区を 20 キロ流れ下って、最後は田園都市線の二子玉川駅直下で多摩川に合流する。

下図手前の野川は、鉄橋の上に建てられた駅のホームの下で、向こうを流れる多摩川に合流する。同じ一級河川とはいえ、延長 138 キロの多摩川とは格が違う。でも都会の中に残された貴重な憩いの場として、また大雨時の排水機能を担う水路として、大切な役割を果たし続けていることがよく分かった。



仙川は小金井市貫井北町に端を発しているが、市街地を屈曲して流れるコンクリート水路が続いたあと突如立派な川に変身する様子は、野川の場合とそっくりである。仙川の実質的始点は、三鷹市新川の人見街道にかかる野川宿橋、下の写真がその様子である。ここ以降、野川に合流するまでの約 11 キロ、兩岸に遊歩道を持つ川原が続いている。



始点は味も素っ気も無いが、下流に向かって段々と自然さが増してくる。水量も野川とさして変わらず、鯉が泳ぎ、鴨や白鷺がたむろする点も同じである。

兩岸の遊歩道も二三の迂回点があるほか連続しており、咲き誇る桜が川辺を飾る点でも遜色ない。野川をやや小振りにした感じだが、雨水の排水路としての重要さは引けをとらない。

三鷹市、調布市を過ぎて世田谷区に入ると、やがて旧東京教育大学の農場跡地にできた祖師谷公園を貫通して流れる。成城の我が家から歩いて10分。仙川散歩の起点となっている。下図は公園内の鞍橋から上流側を見た眺めで、3月26日撮影、今年は満開が早い。ここから下流も、成城大学、東宝撮影所と桜の名所が続く。



仙川の末端は味気ない。下図のように工事中の橋の下で手前の野川に流れ込んでいる。多摩川まであと2キロ弱、奥多摩から発した清流と一緒に東京湾に注ぐ。



(終)

— 追記 —

日立の中央研究所で行われた講演会に参加した機会を利用して、野川の源流となる湧き水と、それを溜める湧水池をこの目で確かめることができた。武蔵野の面影を残す鬱蒼とした森の中で、思ったより大きな池（名前は大池）が清らかな水を湛えていた。

最初の一滴が湧き出る野川の原点。大池から 50 メートルほど離れた場所にある。



東西に 250 メートルほどある大池の西端。中程にある水門から野川に流出する。

